

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平 ha 成 26 年 月 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	田中 美帆

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 25 日 ~ 平成 26 年 6 月 28 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
公益財団法人日本モンキーセンター
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>犬山にある日本モンキーセンターにて、動物園学博物館学実習を行ったので報告する。本実習は PWS の出口の一つである「博士学芸員」の仕事について学ぶとともに、霊長類およびワイルドライフサイエンスの環境教育の実践に触れることを目的としている。内容としては、キュレーターさんや飼育員さんたちによるレクチャーを受け、現場にて飼育実習および教育活動を体験した。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>日程</p> <p>6/25 講義: モンキーセンターの歴史 (伊谷先生)、園内見学 (綿貫さん)</p> <p>6/26 講義: 博物館としての動物園 (高野さん)、園内見学&来園者会話調査 (赤見さん)、日曜サロン: 人とサルの寄生虫 (岡本先生)、科学コミュニケーション実習&講義 (大淵さん)</p> <p>6/27 獣医見学 (岡部さん)、講義: 展示学 (綿貫さん)、標本実習 (新宅さん)</p> <p>6/28 飼育実習 in kids zoo (長谷川さん)、講義: 霊長類基礎セミナー (早川さん)</p> </div> <p>初日は伊谷先生からモンキーセンターの成り立ちについてのレクチャーを受け、その後、綿貫さんから説明を受けつつ、センター内を見学した。1956年に設立した後、たくさんの霊長類研究者を送り出し、不景気による荒波にもまれながらも、“博物館登録のしてある動物園”としての現在の日本モンキーセンターに至った背景を聞いた。今までどれだけモンキーセンターが霊長類界に影響を与えてきたのかを知ることができた。またそれと同時に、見学によってセンターの現在の状況 (施設の老朽化や狭い飼育ゲージでもどうにもできないこと、来園数の少なさなど) と少ない予算ながらも工夫することで現状を打開しようとしている様子を見ることができた。途中であいにく雨が降ってきたが、逆にゆっくり見学することができてよかったと思う。</p> <p>2 日目は、数多くのプログラムを経験することができた。まずキュレーターの高野さんから博物館登録してある動物園としてのモンキーセンターについての講義を受けた。また科学コミュニケーションを学ぶために、園内のお客さんの会話の聞きとりをし、その後お客さん相手に円滑に自然にかつ科学的にコミュニケーションをとる実践を行った。私はセンター内中央の東園と西園をつなぐ通路に設置されたワオランド mini にて、来園者会話調査と科学コミュニケーション実習を行った。さらに、センターでは毎週日曜に一般の方向けに研究について説明する日曜サロンが行われているのでそれにも参加した。今回は、岡本先生による人とサルの寄生虫のお話であった。センターの特色は、博物館登録のしてある動物園として研究や環境教育に重点を置いてあるところだそう。しかし、会話を聞く限り、多くの人は動物園というものをただ単に動物を見て癒されたり、家族や恋人と過ごす行楽地としてしか見ていないようであった。その後の科学コミュニケーションの実習では、動物園側とお客さんとの間にあるギャップを埋めていくことは難しい課題で、そのために特にコミュニケーションが重要であることを実感した。コミュニケーションについては多少自信があった分、二日目の実習は印象に残った内容となった。</p> <p>3 日目は、午前中はセンター内にある動物病院にて、獣医師としての仕事を見学した。また午後は綿貫さんによる展示学の講義を聞き、その後新宅さんから亡くなったサルたちを標本にするまでの過程とその大切さを教わった。3 日目は、様々な分野の方々が講義および実習を担当して下さい、改めて動物園を運</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

営していく上で多くの人に関わっていることを実感した。まず岡部さんから動物を手術する前の麻酔について説明をうけた。麻酔は野生動物を研究する上で覚えておく必要がある事柄であると思う。一番最後に抜糸を行ったフサオマキザルが、ゲージに入れた直後に麻酔が切れ、暴れだしたのが印象的であった。また午後の展示学講義は、動物園の歴史から展示のブームの推移についてをまとめて下さっており、非常に分かりやすく面白かった。標本実習では、検体を骨にする過程を見学した。センターでは、手間や時間がかかるにも関わらず、今まで飼育されてきた動物たちの標本をきちんと保存しており、博物館登録のしている動物園としての役割を果たしていた。

最終日、キッズズーにて飼育実習をさせていただいた。担当してくれたのは、飼育員である長谷川さんだった。リスごるへの餌やりやキッズズー内の清掃や餌やり、倉庫にて翌日の餌の仕分けなどを行った。キッズズーでは、ヤギやモルモット、ウサギなどのメジャーな触れ合える哺乳類からカメやトカゲなどの爬虫類、サソリなどの昆虫などにも触れ合うことができる。時間は短かったが様々な動物と触れ合うことができ、単純に楽しかった。また、動物の展示の仕方をもっとよくできないかと思案しており、職員の一人ひとりがセンターをよくしていくために考えている姿が印象的だった。午後は早川さんが今まで行ってきた霊長類の調査風景について説明してくれた。さまざまな国での調査は非常に楽しそうだった。

このように、非常に多くのプログラムを経験することができた。それぞれの体験や見学を通して、実習の目的である「博士学芸員」の仕事を学び、環境教育とはどういったものなのかを実際に触れることができた。飼育下でも野生下でも、動物から得た知識を、動物園だったらお客さんや一般の人に、野生動物だったら地域住民の人たちに還元していかなければならないことには変わりはない。この経験は、自分の研究内容を分かりやすく人が興味を持てるような形で提供したり話さなければならない時に生きてくると思



写真1：園内見学



写真2：標本実習



写真3：飼育実習

う。

6. その他 (特記事項など)

今回の実習はPWSの助成を受けて遂行されました。関わってくださった方々に深く感謝申し上げます。